

<原著>

エコロジーの課題とレジャー  
—自然との共感に根ざす日本文化の価値の再考—

須賀 由紀子<sup>1</sup>

**The Issues of Ecology and the Leisure Life**  
**—Reconsidering the Value of the Japanese Culture Having Sympathy with Nature—**

Yukiko Suga<sup>1</sup>

**Abstract**

The aim of this paper is to consider about the vision for a better leisure life from the viewpoint of the issues of ecology. The author pays attention to the value of Japanese traditional culture, which share similarity with the thought of deep ecology, one of the most influential ecological movements today searching for new lifestyle facing the global environmental problems.

Through this research, three points were found. First the Japanese culture, judging from the example of herb dyeing treated in this paper, has the power to make us adore and harmonize with nature. Second, the Japanese poetry waka plays an important role to make us see the scene of the nature with deep feelings. So the knowledge of waka might be a good way to understand the meanings of nature for the human-beings, and the teaching of waka might be an effective way to create an ecological society. In particular, Manyo-shu should be regarded as the best text to learn waka, because it is the best anthology of ancient waka poems, full of words based on strong relations between the nature and the human-beings, and it also presents what we should value in the ordinary life. Third, the knowledge of waka could have the possibility to make the leisure life happy from the viewpoint of philosophy of leisure.

So the conclusion is that the education of waka, especially of Manyo-shu, should be the best way toward creating the ecological society and making the substantial leisure life.

**1. はじめに**

「地球環境問題」<sup>1)</sup>に対して意識を深めることは、暮らし方の選択に大きく関わる現代の課題である。とりわけ、東日本大震災を経験し、「文明社会」の負の側面を身近に感じた日本は、20世紀の「成長社会」をひた走ってきただけに、これからの時代の新たなる暮らし方を問い、そのモデルを提示していきたい。この課題に、レジャー・レクリエーションの領域においても、何らかの役割を果たしていくことが求められるのではないだろうか。

これからの時代のライフスタイルに向けて必要なことは、生活価値観の問い直しという課題であろう。「現在の便利で快適なライフスタイルが人間にとって本当に豊かな生活であるのか」という観点からの問いである。自然と人間との関わりに意識をもたらす「環境教育」<sup>2)</sup>も、そうした問いを根底において、「持続可能な社会」に向けてのライフスタイル形成に力を発揮していく必要がある。

一方で、今日の日本は、本格的なレジャー時代

を迎えている。長寿化に伴い、人生で享受できる総自由時間量が増大している<sup>3)</sup>。また、「ワーク・ライフ・バランス」の生活意識も広がりを見せており<sup>4)</sup>、自分自身の時間を人生全体でどう充実させていくかに重きが置かれる社会が到来している。こうした社会を迎え、自由時間の活動を生きがいや幸福感の感じられる暮らし方へどうつなげていくかというレジャー享受能力の課題は、進む高齢化社会とも関わり、ますます重要性を増していく。従って、レジャー享受能力をいかに高めるか、その社会的支援はどうあるべきかという課題は、もう一つの大きな現代的な課題と捉えることができよう。

以上を踏まえると、これからの環境社会にふさわしい暮らし方を築くという課題と、長寿社会を人間らしく生きるためのレジャー享受能力を豊かにしていくという課題と、この両方の問題意識の中でライフスタイルを構想していくことは、21世紀の幸福な暮らしのかたちへと結びつくものと考えられる。そこで、豊かなレジャー・ライフの形成を念頭に置きながら、環境社会にも資するようなライフスタイルのあり方とそのための意識づけ（動機づけ）の問題について検討し、これからの時代にふさわしいレジャーへの問題提起を行うことが本稿のねらいである。

本論は次の手順で論考をすすめていく。まず、エコロジーおよびエコロジー運動の思想から、これからの暮らしで大切にしていきたい考え方を提示する。次に、それを現代の暮らしで実現する手だてとして、日本の伝統文化の持つ可能性を考察する。ここでは日本古来の染織の営みと和歌の伝統を題材として取り上げ、そこにみられる自然と人間の関わり方の特徴をエコロジーの課題との関わりで検討していく。その上で、日本の伝統文化をこれからの暮らしに生かす意義と方法、および、レジャーとの関わりについて論じる。

## 2. これからの暮らしに求められる視点～エコロジー思想から

「地球環境問題」を問う時に、「自然と人間の関わり」が一つのテーマとなるが、そもそも人間も自然の一部であり、人間の暮らしの営みも、常に自然と対峙しつつ形成されてきた。従って、人間

を取り巻く自然環境にどう接するかという課題は、これまでの歴史の中にも存在した。しかし、現代の地球環境問題の特徴は、機械文明、科学技術文明が生み出したものであり、これまでとは質も違い、速度も違うところに特徴があるとされる<sup>5)</sup>。

そこで、われわれは、今一度、自然についてよく知り、理解していかななくてはならない。ここに、環境教育の原点がある。相手となる「自然」とは、どのような姿がその本質なのであろうか。それに対する見方を与えるのが、生態学（エコロジーecology）である。

「エコロジー」という言葉は、ダーウィンの『種の起源』が世に示された7年後の1866年、ドイツの生物学者、エルンスト・ヘッケルによって提示された、というのが定説である<sup>6)</sup>。ギリシア語をルーツに持ち、「オイコス」（家）と「ロギア」（論）という二つの語幹をひとつにしたもので、語源的には「棲み家の科学」を意味する<sup>7)</sup>。「周りを取り巻く環境との相互作用を含めて生物を研究する」という考え方がその原義であった。

ヘッケルはダーウィニズムの普及に力を注いだ人である。この点を捉えて、入江（2008）は、エコロジー思想の理解にはダーウィンの進化論を正しく知ることが重要であると論じている。進化論の核心は「自然淘汰説」にある。自然淘汰の生存闘争をくぐり抜けた生物種が、様々な形態をとって、多様に共存・共生するのが自然界である。ここで重要なのは「長い時間をかけた累積的な効果、影響」であるという点である。たとえば、土中で生き延びる方法を選んだミミズも、その存在が柔らかな肥沃な大地を生み出すという意味では、生態系全体の中での存在価値がある。その意味で、生態系は、生物が生物として生きる「時間」の中に生み出され、その中で「多様な価値」が共存していく。それが進化の姿である<sup>8)</sup>。

この立場に立てば、自然の姿を見るときに大切なのは、この「時間性の価値」と「多様性の共存」という視点になろう。「時間性」は、個体の有限の命が紡がれて刻まれるものであるから、「循環性」という価値が内在する。

このような古典的な議論から説きおこすまでもなく、今日では、太古の深海で生じたと考えられている最初の生命体の発生以来、長い時間をかけ

て様々に進化をしながら、それぞれの「時間」の歴史を個体内に刻み、地球全体の生き物の多様性ができあがっている、という生態系の姿が明らかにされている<sup>9)</sup>。

自然界の生き物は、個体として個々の時間を生き、やがて死ぬ。しかし、次の世代を生むことを通して、生き物の「いのち」そのものはつながり、生態系の時間は紡がれていく。人間以外の生物は、この自然の摂理に従って、個々の生を精一杯に生きていく。それが自然の姿であるが、そこに人間の科学技術や経済発展の思惑が介入し、自然の時間を人為的に裁ち切り、生態系を壊していくことになってしまった。従って、地球環境破壊を食い止めるためには、われわれ人間も生態系をなす一員として、そうした自然の精一杯の命の営みや自然界の精巧な仕組みに共感し<sup>10)</sup>、われわれ自身も、自然界の一員として、自然の時間と多様性の共存の中に生きるという暮らし方を取り戻すことが必要である。こうして、エコロジーへの意識は、「生物学の研究」という領域を超えて、われわれ自身の生き方、暮らし方の変革への意識を生み出していく<sup>11)</sup>。

このように、地球環境問題への問いかけは、現代文明に対する思想的反省を伴いながら、人間の行動規範や倫理的規範を問うものへと展開する。その中で、自然と人間との深い内観的交流の経験を原点として、自然に対する人間の行動規範や倫理的規範を問い、ライフスタイルの変革へと向けていくエコロジー運動も生まれた<sup>12)</sup>。

その一つの潮流をなす「ディープ・エコロジー」では、人間対自然という二元論ではなく自然との根源的な関わりを求め、人間もその一部であるところの自然に主体的・内観的に対峙をし、その中で本当の自己 (Self) を発見することを求める。謙虚な心になり、そこで感じとるものの深さを基盤に、自分の生活のあり方、人間と自然との関わりのあるあり方を見出していこうとする (ネス、1997)。また、フランスのガタリによって提唱された「エコゾフィ」の思想では、自然環境のエコロジーを取り戻すためには、社会環境のエコロジーと、人間の精神自身のエコロジーをともに考えていかなければならないことが述べられる。社会環境のエコロジーとは、良好な社会関係のこと

であり、精神のエコロジーとは、自分自身の心身が様々な欲望に囚われることなく主体を持ち、自由な状態にあることと捉えられる。そして、現代のような刺激の多い社会の中では、「精神のエコロジー」を取り戻し本質に向かうことが必要と説く (ガタリ、2008)。

こうしたエコロジー運動では、「自然の声」「地球の声」を感じながら、様々な生命のつながりの中の自己を認識していくことに重点を置く。そのため、瞑想によって意識変容をはかるという方法がとられる (熊倉、2012)。俗界から隔離された空間の中で、自然と人間の根源的一体感を感じ、人間的欲望に満ちた近代化した世界観を捨て去り、「本来の自分」を取り戻す。「本当に大切なものは何か」を認識し、欲望に囚われることのない節度ある生き方、暮らし方へ意識を変えていく。このようなディープ・エコロジーは、意識高い人々による特定のコミュニティでのみ受け入れられるものであり、「ロマン主義的自閉」に陥る可能性も指摘されるなど、実践的でないとか社会的でないといった批判もある<sup>13)</sup>。しかしながら、「自然と人間の根源的一体感」の価値に立ち戻り、そこから暮らしの姿勢を問い直すとするディープ・エコロジーの考え方自体は、これからの暮らし方に重要であろう。

以上を踏まえると、「自然と人間の根源的一体感」を感じるような時を持つ暮らしが、エコロジーの時代に望まれるライフスタイルとなると考えられる。問題は、それを特別な瞑想や特定の高い意識を持ったグループの人だけが行うものではなく、日常的な暮らしの中で、自然に馴染むかたちで浸透させるには、どうすればよいかという課題であろう。

そこで着目したいのが、日本が古来より培ってきた文化の伝統である。環境哲学の研究者たちによって、ディープ・エコロジーで大切とされる「自然と人間の根源的一体感」は、日本の伝統的な自然観と親和性が高いことが指摘されている<sup>14)</sup>。日本の生活文化は、自然に根ざした暮らしの中から生まれたものであるから、その価値の再発見の中に、エコロジーの時代にふさわしい暮らしが展望できるのではないかと。このような問題意識のもと、本稿では、日本の染織と和歌の文化の中に、「自

然と人間の根源的一体感」によってもたらされる価値とは何かを検討していく。そして、そこから、現代のライフスタイルへの視点を考察する。

### 3. 染織文化にみる自然と人間

本節では、まず染織文化を事例に取り上げる。染織文化に着目した理由は、人間の基本的な行為である衣食住のうち、「食」と「住」は他の動物と共通な行為と考えられるが、「衣」の行為は、人間ならではの文化である、という点にある<sup>15)</sup>。自然の中から素材を得て、それを人間が纏うものへと美しく変化させていく営みの中に、人間は自然からどのような価値を受け取るのでしょうか。

ここでは、重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定されている染織家・志村ふくみ（1924-）の著作に描かれた染織の世界をもとに考察する。志村については、詩人・大岡信が、自然との関わりの中に「言葉の生まれるところ」があることを示しえる人として取りあげている<sup>16)</sup>。また、彼女の著作『一色一生』は、自然界の恵みの色に惹かれ、望みの色を生み出すため一生をかける仕事の中で出会った様々な人や色の世界を語ったもので、第10回大佛次郎賞を受賞している。志村の著作の中には、染織の「心と技術」を持った第一人者が、その営みの中で感じ、見た世界が的確な言葉で示されているとみてよいであろう。

志村は、植物から取り出す染料で糸を染め（染色）、風合いある着物を芸術作品として織り上げ（織物）、日本古来の染織文化の伝統を紡ぐ<sup>17)</sup>。常に自然と対峙する中で、志村は自然のどのような姿をみているのか、そして、そこに、自然と人間の関わりを価値をどのように捉えられるのかを、ここでは考えてみたい。

第一に、志村は、染色とは、植物の花、実、葉、幹、根が持つ色を糸に染め出す行為であるが、それは自然の生命の色の中に「いただく」行為である、とする。志村は、植物の持つ色を、「こちらに宿したい」と表現する<sup>18)</sup>。そのためには、自然の移ろいを肌で感じ、対象とする自然が生命のエネルギーを一番蓄える時を待つ。「植物にはすべて周期があって、機を逸すれば色は出ないのです。たとえ色は出ても、精ではないのです」と語る<sup>19)</sup>。それは、必然的に自然の「息」に人間の側

もリズム合わせていくようなものとなり、人間は自然の命のリズム、自然が生きる「時間」というものを肌で感じる。たとえば、志村は、桜の木を染めたときの経験として、春先のこれから芽吹くという時の桜の木の枝から染織しないと、桜色の染め出しはできないことを語っている<sup>20)</sup>。花を咲かせ、命をつなぐために、物言わぬ木も、一年の時の循環の中で、一番力のこもった樹液をこの時期に合わせて貯めているのである。こうして、自然の大きい「いのち」をいただくという行為の中で、自然が有する時間性（循環性）のリズムに共振し、共感し、自然の一部である人間も、そのリズムに合わせて生き、自然のいのちと時間の価値を暮らしの中で感じることになる。

第二に、志村は、自然の色は実に多様であることを語る。たとえば、鼠色は、様々な植物からも取り出すことができるが、一つひとつの植物に固有のねずみ色があるという。日本人はその捉え方が誠に細やかで、「四十八茶百鼠」という言葉も生まれている<sup>21)</sup>。しかも鼠色は、どのような色の組み合わせとも邪魔することなく混じり合い、穏やかに平和な色の世界を創り出す。このような色の姿に接していると、多様性が共存する姿が極めて自然なことであり、それに共感する心が自然に生まれるのである。微妙な色の違いを敏感に受け止める心は、自然に繊細に接する姿勢を生み、そこから美意識や日本人ならではの心性も育まれていくと考えられる。その繊細な受け止め方は、生活の仕方、ものの見方、世界観に影響するのである。

前節において見たように、多様性をもつことが生態系の自然な姿である。自然界の一部である人間も本来は多様であることが自然であるが、そのことを忘れ、できるだけ平準化・規格化することを善しとしてきたのが近代社会である。それがいかに「不自然」なことであるかが、こうした自然の姿に感じ入る暮らしがあれば、気づくことができる。

第三に、自然は、人為的行為や人間の予測では届かない神秘を有することに、染色の営みの中でじかに接することができる。たとえば、志村が繰り返し引き合いに出すのが、「緑色」の話である。緑色は、自然界ではこれほどたくさん目にするこ

とができるのに、自然界のものからは直接に染め出すことができないという。緑色は、藍と黄色の染料を混ぜ合わせて染める。その瞬間に創り出される色はえもいわれぬ美しさで、緑色が生まれる瞬間に立ち会うと、「生まれてくる」ものの神秘と美しさの実感を持つという<sup>22)</sup>。しかし、それは長くはとどまらず、すぐに変色してしまう。このような色の神秘の世界に出会うにつれ、「目に見えるものの向こうに目に見えない本質がある。本当のものは、みえるものの奥にある。そのことを教えてくれるのが、人間を包み込む自然界の不思議、絶対的な大きさ」と志村は語る<sup>23)</sup>。こうした人智では及ぶことのできない世界に心沿わせていると、謙虚になり、自然に対して節度を以て接する気持ちも強くなる。

第四に、染織の営みは、相手の自然を愛しむ心を究極にまで高める。それが人間を、より本質へ、より本物へと向かわせる。その典型が、藍染めの仕事である。藍染めは、植物染めの中でも特別に難しく、染める人の精神性を表すという。蓼藍(たदैい)という植物を原料として発酵させてできる「藍の花」のできばえは、心のかげようである。「仕込みから、藍の終焉を見送るまで、日々藍から目を離すことはなく、朝、甕のふたをあけた時の顔の色、艶、建ち上がりの腰の力、におい、味、手ざわり等、五感のすべてを働かせて、かすかな変化も見のがすことなく」関わり、温度や湿度に細心の注意をはらい続けるうちに、藍甕の中に手を入れた瞬間に藍の状態がわかるという関係が生まれる<sup>24)</sup>。自然と自分自身の「いいしれぬ一体感」の中で藍染めの仕事はすすみ、仕事を終えた時に、藍の命とともに生きた自分を感じ、充実感とある種の寂寥感に浸されていく。

以上のような染織文化の世界に生きて、志村は、自然界から色をいただく染色の営みを、「自然界の変幻極まりない仕組みの中には、一定のリズムや周期がめぐってきて、われわれにはほんの一滴のしずくをしたたらせてくれるのです。それを受け止める態勢がこちら側に整ったとき、はじめて色が生まれるのです。自然界の扉の剛直さ、棘の鋭さ、蜜の甘さ、それらが縋り交って、玄妙な調和ある色彩がもたらされるのだと思います」と受けとめている<sup>25)</sup>。

ここに通底するのは、「自然の命のリズムに心の耳を傾けて聴く」という、いわば「沈黙の時」の深さに感じ入る心である。「相手の自然が、今どういう状態にあるのか」を思い、相手(自然)に寄り添いながら、心を傾ける。それが「自然の声」を聴くということであるが、それを聴くためには、自分を無にして、自然に身をゆだねるしかない。すると、自然の不思議や自然の力の大きさに驚かされることにしばしば出会う。このような自然には謙虚にならざるを得ず、畏敬の念に満たされていく。それが、逆に、自然に対していとおしさを感じる暮らしとなる。蚕がはき出すはかなくも力強いいのちの糸を紡ぎ、桜の樹液が精一杯に命開かせようとする事実立ち向かうにつれ、自然の営みにいとおしさを感じられるのである。

この自然との対峙の中で、人間の精神は、自然の中に、生命の本質を見る。そこに、「力ある言葉」が生み出され、その人のものの見方、価値観となっていく。「力ある言葉」とは、日常的なコミュニケーションの伝達の手立てとしての言葉ではない。「単純そのもの」といいが、その単純な言葉が引きずっているものの世界は大きくて深い<sup>26)</sup> というような、「世界」の本質を捉え、人が生きる支えとなるような言葉である。

自然に接していると、自分の予想や計画を超え、驚きや思いがけない歓びに出会うこともある。それにより、より高いところに精神の世界を向けていくことができる。そうした自然と人間の接点の中に、虚飾ではない、驚きや歓びや心からの哀しみに満ちた美しい言葉、意味深い言葉が紡ぎ出されていく。それは、真摯な生活の営みの中で感得される「いのち」の本質を内包する「力ある言葉」である。従って、その言葉に触れる者の魂を揺さぶり、我が身の生き方を振り返らせる力ある言葉、美しい言葉となる。

大岡は、志村の言葉は、その言葉が捉えている対象の向こうに、自然界の本質の大きな世界を捉えている、という<sup>27)</sup>。部分を語りながら生命現象の全体を捉えている言葉は、思想や感性を豊かに育む。自然と直に接し、自然に耳傾け自然と語らう暮らしの中に、生きる支えとなる「力ある言葉」が生まれるのである。

このように捉えてくると、「自然と人間の根源

的「一体感」の価値は、「沈黙の時の豊かさ」に満たされて、人間が自然から「力ある言葉」の世界を受けとめるところにある、と考えることができる。そして、自然に根ざした日本の生活文化は、そうした時の豊かさに恵まれる可能性を有する。そこに歓びを感じる「心の習慣」を大切することは、これからのエコロジーの時代に極めて本質的な、ふさわしい暮らし方となるのではないか。

#### 4. 言葉を豊かに持つ暮らしと和歌の伝統

このような「自然と人間の根源的一体感」に根ざす「力ある言葉」は、日本人の文芸の伝統である和歌を繙くことによって、深めていくことができるのではないだろうか。そこで、次に、和歌の言葉の中にみる日本人の「自然と人間の根源的一体感」の特徴を捉え、これからのライフスタイルにおける和歌の伝統の価値を考察する。

詩の言葉は、「世界」の本質を描き出す美しい言葉の結晶であるが、日本の詩歌は、五音・七音の短詩型で「世界」を写し取る形を育んできた。特に、短い言葉の中に「自然」そのものを謳い、細やかな内面の嬖や深い精神性を重層的に響かせる、「叙景歌」とよばれるジャンルが発達した(大岡 2005)。

叙景歌は、日本的な特徴の文学で、「目に見える外界の事物を、混沌たる内部世界の比喩、あるいは象徴として、いわば主客未分の状態において表現」するものである<sup>28)</sup>。そこでは、対象とするものの美しさの客観的な事実よりも、対象に関わる主体が持っている心の深さが、事物の美を決めていく。歌われる対象の自然は、それを見る心の深さと一体となって、美を深めていく<sup>29)</sup>。

美学者の佐々木健一(2010)は、西洋の人々の花の美に対する感じ方との対比を踏まえて、日本人と自然の関わりの特徴を次のように捉えている。一つは、桜の美(霊気)にそこはかたく包み込まれ、その中に「われ」を感じる《意識拡散型》の関わり方である。もう一つは、芭蕉の句に端的に表れているように、見つめる対象そのものに意識を凝縮し、その対象の像に「今ここ」の自らの意識を同化させ、そのものと一体化するところに情を感じる《一点集中型》の関わり方がある<sup>30)</sup>。日本人の自然の接し方には、この二つの

「世界同化」の方向がある。この中で、日本人は自然の中に「気色」を見ている。「気」とは、「宇宙にみなぎる息」であり、そこで感じとる「色」は、「身体的な直接的な接触」に基づいている<sup>31)</sup>。眼前に見ていなくても、ありありと思ひ浮かべて、「触感に満たされている」のである。それは、触覚を伴いながら身体(魂)に染み渡り、一定の「広がり」を持ち、「わたし」が占有する時間・空間となる。その中で「わたし」は、「近景」を見ていながら、「遠景」(事の本質)を感じている。その風景は、誰のものでもない「わたしにとってのもの」なのであり、「われ」は「世界」の色に染められる<sup>32)</sup>。

こうした感じ方は、言葉を換えてみれば、日本人は自然に接するとき、「幼児のまなざし」で関わっていると言ってもよいであろう<sup>33)</sup>。すべては「自分中心」で、「今ここ」にしか意識はない。目の前の「今」が全てである。それこそが、「自然と人間の根源的一体感」であり、こうした自然と自分との関わりの中に生まれる思いが、短詩型の和歌の言葉に捉えられる。短詩型であるがゆえに、凝縮されて濃密にその思いが込められている。しかも、現代のわれわれは、それを古くさいものとか、原始的なものとして一笑に付してしまうということはない。むしろ、今日のわれわれの心にも響き、共感できるものとして、そうした言葉を受けとめることができるのである。今日に伝えられる最も古い歌集・万葉集が、今日なお変わらず人々に愛され続けているという事実が、それを物語っている。

大岡も、日本人の美の感覚は、視覚よりも「気配」で感じとる聴覚、あるいは、触覚や嗅覚、味覚といった「人体のより内部でうごめく感覚」を通して、より深く捉えていこうとする志向性が日本人にはあって、それが、自然世界への感じ方をより一層内面性豊かなものにしていくという見解を述べている<sup>34)</sup>。

「歌のたね」は「人の心」にあるが<sup>35)</sup>、「人の心」は自然の中の事物に重ね合わされて感じるのが日本の伝統である。葦が風に揺れる音に、不安が重ね合わされる。梅の香りに恋の気持ちが重ね合わされる。闇夜に飛ぶ螢の明かりに、揺れる恋心が重ね合わされる。「人の心」は、「一木一草のゆら

ぎに容易に同化し、鳥や獣、虫や魚と一緒にって詩を歌う」<sup>36)</sup> 和歌の言葉を通して、自然と人間の一体感がさらに深められて同化し、両者の間に「和する関係」<sup>37)</sup> をもたらす。そうした日本人の心が、自然の中に叙情の世界を込め描写する、世界でもまれにみる文芸の伝統を築き上げてきているのである。

どの民族にもあったと考えられる原始的なアニミズムの自然観が、日本では詩歌の言葉に表現され、その心が研ぎ澄まされてきた。今日にも残る伝統の和歌を繙くことを通して、われわれも、いにしえ以来の自然への思いに同化し、四季の移ろいに心弾ませ、精一杯に開く花の命に自らの心を沿わせていくことができる。それは、自然の姿に命の本質を感じとった人々の「力ある言葉」に思いを重ねて自然の風景を見るということである。

従って、日本のあまたある自然歌に親しみ、その眼差しを以て道ばたに咲く花や木々、空や山の風景に眼を向けて、自然と人間の一体の中に感じとられた古人の思いをそこに重ねるといふ時を重ねる。そうすることが、自然への一体感をより深め、日本の伝統文化の価値を生かした暮らし方への道となる、と考えられる。

中でも、万葉集は、作者の幅の広さ、心の純朴さ、描かれる生活世界の身近さから、「親しさ」がある<sup>38)</sup>。また、自然を美しく歌う伝統は古今和歌集などにつまびらかであるが、古今集の時代は、漢詩文学の影響も十分に受け、自然と一体化しながらも、理知的に自然を捉え、技巧的に歌っているとされる。それに比べて万葉集は、技巧によることなく、自然そのものの中に身体も心も入り込み、自身をゆだねて歌っているという特徴がある<sup>39)</sup>。しかも、老若男女貴賤を問わず、自然に根ざし、自然の中に祈りを感じて来た人々の生活の中の思いが盛り込まれている<sup>40)</sup>。

万葉集を紐解くと、万葉歌人にとって、彼らの身近な生活を取り巻く「ありとあらゆる自然のもの」が歌いかける対象になっていたことがわかる(武田、1946)。身近な生き物から四季のめぐり、都会の中の自然のこと、そして、旅路の中で見る山や海の風景、さらには「天の海」としての天空、そして、大和人の生活を取り巻く山への信仰などがそれである。万葉歌の特徴は、後の古今集以降

の和歌に比べて、自然に託す生活への祈りの気持ちの深さにある<sup>41)</sup>。自然を美的観照的に捉えて表現するのではなく、本当にその自然のものに同化して歌いかける。歌いかけられた自然の風景や生き物は、人間の言葉を理解して、人間の思いに共振し、感化されると信じられていた<sup>42)</sup>。たとえば、琵琶湖に浮かぶ水鳥に託して歌われた柿本人麻呂の自然描写の歌、「近江のうみ。夕波千鳥。汝(な)が鳴けば 情(こころ)もしの ににしへ思ほゆ」(3-266)は、かつて栄えた近江の都の荒れ果てた姿を見て、人事のはかなさに思い潜め、戦没した人の魂の鎮めを祈る歌だが、琵琶湖の湖面の夕暮れに浮かぶ水鳥も、心からその思いが共有していることが信じられて、「汝がなけば」と呼びかけられた。大和の守り神の三輪山に対して額田王が歌いかけた「三輪山をしかも隠すか。雲だにも情(こころ)あらなも。隠さふべしや」(1-18)という歌は、大和の地から近江へ都を移す決断をした天智天皇一行の旅の不安を鎮め、前途の成功への祈りの気持ちを込めてうたった后・額田王の歌で、その思いの深さ、強さが、三輪山に託して力強く歌われている。いずれも、歌いかけた自然の事物が人間の思いを受けとめ、理解してくれるものと信じて、思いが託されている。万葉の歌を繙くと、こうして自然に託して詠われた、日本人の生活への思いの原点に出会うことができるのである。

万葉人にとって自然は、崇高であると同時に、生活の中の親しみの感情を持って歌いかけられた<sup>43)</sup>。こうした自然と人間との根源的一体感に基づく万葉集の歌は、目に見える自然の風景に対する思いの込め方、思い潜める深さを示してくれる。自然と根源的に一体化している万葉の歌を口の端にのぼらせると、自然世界に思いを潜めた古代人の思い、その向こうに人間を包み込む大いなる世界を感じてきた古代人の声を聴くことができる。自然の風景を、単に情景、写生としてではなく、そこに深い思いを込め、鳥や波間や風の音に思いを潜め、また広大な風景の中に自らを一体化させてきた人々の思いがよみがえってくる。そこに心寄せれば、古代人の思いを自分の心に一体化し、今自分の周りに見える鳥や川、山や空といった風景にも深い思いで関わり、自然の霊性を感じて接

することができると考えられる。

そうした言葉に触れ、その言葉を詠んだ人々の心を心の糧とし内在化していくところに、日常生活を取り巻く自然の風景に、意味深く関わるライフスタイルが生まれてくるのではないだろうか。

以上のことから、万葉集は、自然や生活の実感にふれる「触感」を豊かにすることができる教材として最もふさわしい。理性や観念で自然を捉えるのではなく、五感を働かせて「自然と人間の根源的一体感」に感じ入る。自然と完全に同化し、そこに祈りを込めた万葉の言葉は、その感じ方を深めてくれる。

また、古代人の素朴な精一杯の祈りの中から紡ぎ出される言葉は、われわれの日常生活の中にある価値を見つめ、日常性そのものを愛しむ心をもたらしてくれる。

こうした和歌の言葉を楽しむ時を、レジャーとして暮らしの中に取り入れながら、自然を愛しみ、節度を持って生活を愛しむ。まさしく、エコロジカルなライフスタイルが展望されてくる。

## 5. エコロジカルな暮らしとレジャーの充実

本稿は、エコロジーの課題を、「自然と人間の根源的一体感の時を持つこと」に置き、それをどのようにして日常的な暮らしの中で実現していくかを問いとし、その可能性を日本文化の伝統の中に探った。

ここまでの考察から、そのための手立てとして、志村の染織の文化にみるような、自然に直に接して、その息吹を感じとる伝統の生活文化を、今日の自由時間社会の中で、レジャーとして暮らしの中に取り入れていくことが考えられる。

たとえば、農事と関わりの深かった旧暦の暦を楽しむ暮らしや、人と自然が関わりあって創り上げてきた里山の文化を愛する暮らし方もその一つである。また、書やお茶、華道や香道、陶芸などの工芸品、日本画や仏像彫刻、庭園や神社仏閣等の建築物、古典芸能や古典文学など、自然に接する心を豊かにする様々な日本の伝統的な芸術文化に奥深く関わり、楽しむという方法もある。それらはいずれも、楽しむためには能力や技術が必要であり、深めていく楽しさがあり、深まるほどに

自分自身のものの見方や感じ方も豊かになる。そうした活動を楽しむことを通して、自らが持つ人間としての可能性が拓かれ、自分が高められていく。過去のよきものに触れる暮らしは、身近な身の回りのものに歴史を重ねてみることができるようになるため、自らの時間に先人の生きた時間の厚みを加えていくことができる。こうした深める価値あるものとの出会いは、「何かのため」に必要なものではなくそれ自身が目的となり、生きがい感や幸福感に結びつく。まさに、これからの長寿社会にふさわしいレジャーと捉えることができる。そして、そのことに価値を持ち、意識さえ持てば、誰もが、いつでも、始めることができる。自分自身が作り手という立場であってもよい。鑑賞者として楽しむという立場であってもよい。それらを楽しむ術を深めるほどに、自然と自分との関わりも深まり、結果的に、エコロジカルな暮らしへと結実する。

一方で、本稿を通じて考えてきたのは、そうした営みの中で、自然の生きた息吹を豊かに感受することの価値であった。その点からみると、上記に挙げた自然と交わる伝統の生活文化・芸術文化を、ただ楽しみや気晴らしとして行うだけでは、命の本質と通いあい、生きる支えとなるような「力ある言葉」に出会えるかどうかは確かとはいえない。こうした活動が、本来的な自然と人間の一体感に根ざした時間となるためには、自然への感じ方を深く捉える「心」が必要であろう。

そういう心を豊かにするために、自然の心に触れる「力ある言葉」を介することが求められる。そこで価値を持つのが、自然の本質を捉える「日本人の詩歌の言葉の伝統」なのである。

以上を踏まえると、われわれの和歌の伝統をレジャーとして楽しむということが、これからのエコロジカルな暮らしの原点となるのではないかと、という結論が導かれてくる。その導入として、日常的な生活に即したところで、自然と人間の根源的一体感に深く根ざして詠われた万葉集の言葉は入りやすいのではないだろうか。万葉集に収められた歌を、少しずつ繙き、味わい、自然の中に生きた祖先の心を糧として、日常生活を取り巻く自然に触れ、先に挙げたような様々な生活文化・芸術文化を深めていく暮らしは、エコロジーの時



代の暮らしとしても、レジャーとしても価値があるといえよう。

さて、こうした日本の生活文化の伝統を現代の暮らしに蘇らせることは、レジャーの享受の本質という視点からみると、その価値をどう捉えることができるか、この点について最後に考察を加えたい。

本稿で検討した染織文化も和歌も、いずれも「自然と人間との根源的一体感」を通して、自然世界に接しつつ、人間の精神世界は、「自然界の向こうにある目に見えないもの」へ心届かせているところに深みがある。このような「自然の向こうにある、あるいはその中に内在する大いなる存在」への思いを豊かにしていくという時の意味は、レジャーの本質と重ね合わせてみることができる。なぜならば、レジャーとは、「本質的な神なる世界と合一すること」であり、自由時間の手段としてそれがあるのではなく、人間として生きることの目的そのものであることは、すでにこれまでのレジャー哲学によって洞察されているとおりであるからである（ピーパー、1988）。

レジャーの本質は、日常性のとらわれの状態から心を解き放し、真善美の価値に心遊ばせるコンテンプレーションの時空間の中で、事柄の本質・世界の本質へと向かっていくところにある。コンテンプラチオとは、「日常生活のあらゆる心づかいや関心をはなれ、小さな自我をぬげることによって、世界をあるがままにながめ、その創り主に触れること」である<sup>44)</sup>。それはキリスト教の精神生活の理想だが、アリストテレスのレジャー（スコレー）の思想、すなわち、自由な心の状態で真理の観照にふけることの価値にまでさかのぼることができる。コンテンプレーションは「観想」と訳され、事物の本質を「あるがままに眺めていること」という意味であるが、それは、主体と客体が距離感ある状態にあるのではなく、そのものの善さに心惹かれて、引き寄せられて、それと一体化せざるを得ないような心の状態をさす。したがって、そこに介在するのは、「愛」である<sup>45)</sup>。それは、たとえば、幼子のかわいい寝顔に思わず見入って心引き寄せられていくような感覚、熱中する白熱したゲームに思わず心引き寄せられて没入するような感じである。

「愛」は、対象に向けて「愛する」という主体的な働きかけに始まるが、本質的にはそのものが持つ美に捉えられて、思わず、その愛の対象に引き寄せられて合一し、一体化してそこに憩う、という意味内容を持つ<sup>46)</sup>。その憩いの中で世界の本質と交わりあい、「沈黙の時の豊かさ」を享受する。

染織の営みも、自然との対峙し、沈黙の時の豊かさを感じとり、自然の恵みに憩う営みであった。和歌の言葉も、自然との一体感の中に生み出されるものであった。その根源的一体感の中にあるのは、対象として見ている自然に対する「愛しみ（いつくしみ）」の心といえるのではないか。

「いつくしむ」という言葉は、ウツクシミとイツキが混ざり合ったものである<sup>47)</sup>。そもそも、「ウツクシ（愛）」は「肉親的な情愛」、「イツキ（斎）」は、「神威に対する畏敬の心」をさしていた。つまり「聖なるもの」に対して、肉親的な「甘え」の感情を持って接する心が、日本人の心のルーツにある。日本人にとって神々なる「聖なるもの」は、生活の周囲の自然のあらゆるところに宿り、人々の生活を支え、拠り所となり、希望を与えた。そういうものに包まれて、そこに心ゆだねて甘え、憩う。そうして、この世界を善きものとして捉え、日常生活を取り巻く様々なことに、今度は自分が愛を持って見つめることができる。こうした時を持つことが余暇の価値であることを示したのが、ピーパーのレジャーの哲学であるが、日本人の自然との根源的一体感、すなわち、「いつくしみの心」は、レジャーの本質であるコンテンプラチオと同じ内容であると認めることができる。

本稿において検討してきたライフスタイルは、人間精神を自然の奥深くあるものと関わらせることをめざすものであり、コンテンプレーションとしてのレジャーに満ちた暮らしである。自然の中の目に見えるものの向こうに、目に見えない真善美の価値を捉える。それを欲び愛するところに、人間の精神が高められ、「力ある言葉」に出会い、その恵みを受ける。身近な生活の中で眼にする草木や水、空や風、生き物たちのうごめきに、いのちの息吹を感じ、それと一体化して憩うゆとりは、とりたてて「自由時間の活動」という枠で捉えることはなくても、レジャーな状態を実現している。

現代は、「ワーク・ライフ・バランス」の時代と言われ、「仕事」と「自分の時間（余暇）」を上手に調和させるため、仕事以外の時間の確保をいかに制度的に保障するのか、という議論がすすめられている<sup>48)</sup>。しかし、本稿の議論を踏まえると、本当は、身近な生活や自然に感じ入る心があれば、レジャーは手にすることができる。生活そのものをレジャー化できると言ってもよい。そして、自然との対峙の中で「本当に大切なもの」に出会ってれば、生活の中で何を大切にすべきかの価値観を持つことができ、物的な豊かさや即時的に移り変わる情報に左右される暮らし方ではなく、本質に根ざした暮らし方となるのである。それは、根本的には自然と息吹を交わすものであるため、心と体が一体化し、自ずと健康な生活を手にしていくことができると考えられる。

このように考えていくと、エコロジーの観点からの日本の伝統の中にある自然に根ざした文化の価値の見直しとレジャーの充実とは有機的に結びつく。そして、レジャー享受能力を高めるために必要なのは、言葉の世界を深める営みであり、そのための古典の言葉を教養として深く味わっていくようなプログラムが、生涯の楽しみとしての学習として、また、環境教育という意味でも必要であると結論づけることができる。なかでも、本稿を通じてみてきたように、万葉集を繙くことはそのきっかけとしてふさわしいのではないだろうか。そして、それを原点として、日本の古典世界に心開かれて、万葉を始めとする古典の心を探ねる旅を楽しみ、日本の美しい自然の風景に意味を持って関わり、自然とともに育まれてきた日本人の心、日本人の手がけてきた様々な美の表現世界への関心を深めていく。このように展開していくことができれば、これからの長寿社会におけるレジャーの充実も自ずと図られていくことであろう。

## 6. まとめ

本稿では、エコロジーの時代の課題を問題意識として持ちながら、「環境」と「レジャー」という2つの現代的テーマを重ねて、これからの暮らしに向けての考察をすすめた。あきらかになったことは以下の点である。

第一に、エコロジー思想の振り返りから、これからの時代、自然と人間の関わりを本質的に深める環境教育が必要であると考えられるが、そのための手だてとして、日本の伝統的な文化の価値を見直すことに可能性が認められる。第二に、自然と人間の根源的一体感を感得する手立てとして、より具体的には、和歌の伝統を繙くことが有意義である。とりわけ、万葉集は可能性を有すると考えられる。なぜならば、万葉集の中には自然への関わり方を深める言葉が満ちていること、そして、古代人の生活感が現代に響くかたちで収められており、それを繙くことは、これからの暮らしで何を大切にすべきかの指針を与えてくれる価値があることがその理由である。第三に、和歌の言葉をもとに日本の古典を深め、日本の文化への見方を豊かにすることは、必然的にレジャーの豊かさをも生む可能性を持つ。以上から、これからの時代のライフスタイル形成において、万葉集をはじめとする日本の古典を紐解き、「自然と人間の根源的一体感」に根ざした文化を内的に受け止めていく経験の積み重ねの価値と、その意識づけの方法について、方向性が示された。

今後の課題として、本稿では、和歌の原点としての万葉集を起点として取り上げたが、古事記の世界も見わたしながら、日本人の原初の自然観とそれが洗練されていくプロセス、そして日本人の美意識の要にある「もののあはれ」と自然の感受の関係性を基軸に、地球環境への心を育むレジャー・ライフスタイルの構想を、より多彩なものとする道筋を考察していきたい。

## 註

- 1) ここで「地球環境問題」とは、森岡（2008）によって概観されている次の理解に従っている。すなわち、「地球環境問題」とは1972年にストックホルム「国連人間環境会議」に端を発し、1987年に発表された「環境と開発に関する世界委員会」レポート『Our Common Future』を経て、1992年にリオデジャネイロで開かれた「環境と開発に関する国連会議」（地球サミット）において決定的に形成された議論枠組みである。その中核にある概念が「持続可能な発展」である。持続可能

- な発展とは、「将来の世代の人々が彼ら自身のニーズを満たすための能力を損なうことなしに、現在の人々のニーズを満たすような発展」のことをさす（森岡 2008、p.45）
- 2) 「環境教育」は、1972年「ストックホルム人間環境宣言」からその重要性が指摘され、その後、様々な国際会議において議論がなされてきた。環境教育の目的は、(1) 環境問題に関心を持ち、(2) 環境に対する人間の責任と役割を理解し、(3) 環境保全に参加する態度と環境問題解決のための能力を育成することで、行動に結びつく人材を育てることが環境教育に重要とされている。（環境省 <https://www.eeel.go.jp/quiz/ans.php?qid=101>, 2013.9.5. 参照）。日本では1960年代に顕在化した公害問題教育、および壊されていく自然に対する自然保護教育という2つの流れを汲みながら、世界でも早い時期から環境教育が学校教育の中に取り入れられた（鈴木 2008、p.155）現在は、「環境教育等による環境保全の取組の促進に関する法律（環境教育等促進法）」が施行され（H24）、この法律において「環境教育」とは、持続可能な社会の構築を目指して、家庭、学校、職場、地域その他のあらゆる場において、環境と社会、経済及び文化とのつながりその他環境の保全についての理解を深めるために行われる環境の保全に関する教育及び学習をいう、と定義されている。
- 3) 2012年の日本人の平均寿命は、女性は86.41歳、男性は79.94歳。女性は2年ぶりに世界1位、男性も過去最高を記録した。（厚生労働省「2012年簡易生命表」）
- 4) 内閣府の調査によれば、「ワーク・ライフ・バランス（仕事と生活の調和）」について、「言葉も内容も知っている」と答えた人の割合は18.9%と、前年度の調査から増加した。「ワーク・ライフ・バランス（仕事と生活の調和）」という言葉聞いたことがある人（「言葉も内容も知っている」と「言葉は聞いたことがあるが、内容までは知らない」と答えた人の合計）の割合は、54.3%と5割を超えている（内閣府「仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）」と最近の経済情勢の影響に関する意識調査」平成21年12月調査実施）
- 5) 鈴木 2008、pp.150-151
- 6) 沼田 2008、p.138
- 7) シモネ 1980、p.6
- 8) 入江 2008、pp.30-41
- 9) 生命科学者の中村桂子によって提唱された「生命誌（バイオヒストリー）」研究は、その意味や深さ、神秘性そのものに目を向けていこうとする仕事である。
- 10) 著書『沈黙の春』で地球環境への継承を鳴らし、「環境」の概念の中に「人的環境」を取り込むきっかけを与えることになったとされるレイチェル・カーソンの晩年の仕事は『センス・オブ・ワンダー』すなわち、自然の中にある神秘に心躍らせる経験を、子ども時代に豊かにさせることの価値であった。
- 11) 日本でも流行語となった「ロハス（Lifestyles of Health And Sustainability）」もその一つに数えられよう。
- 12) 森岡、前掲書、p.47
- 13) 同上書、pp.63-65
- 14) たとえば、竹村牧男：日本思想とエコ・フィロソフィ、東洋大学「エコ・フィロソフィ研究」別冊(2)、pp.97-104、2008など
- 15) 藤井 1986、p.2-1
- 16) 大岡 1981、p.207
- 17) 志村ふくみの仕事を理解するために、彼女の人となりについて若干の説明を加える。彼女は、幼い頃に預けられて養父母のもと育てられたが、長じて再会した実母からの刺激を受けて、32歳の時に、子ども二人を抱えながら職業婦人をめざす。実母は、若い頃、柳宗悦の民藝運動の影響を受け、織物にも篤い思いがあったが、医者である夫を支える立場から断念せざるを得なかった。この母の手ほどきを受けて、美しいものを愛する思い、そして生活の中にある日々の営みの中にこそ美の原点があるという考え方を知り、志村は、独自の染織家としての才能を花開かせていく。また、美しい「色」への思いは、画家を目指しながら結核に倒れ、若くして夭折した兄の影響をふんだんに受けている、という。
- 18) 志村 1981、p.73

- 19) 同上書、p.75  
 20) 同上書、p.74  
 21) 同上書、p.86  
 22) 志村・井上 1986、p.45  
 23) 同上書、p.75  
 24) 志村 2001、p.37  
 25) 志村、前掲書、p.88  
 26) 大岡 1981、p.204  
 27) 同上書、p.206  
 28) 大岡 2005、p.128  
 29) 同上書、p.129  
 30) 佐々木 2010、pp.97-41  
 31) 同上書、p.101  
 32) 同上書、p.131  
 33) ディープ・エコロジーのアルネ・ネスも、幼児の世界が持つ「直接性」が自然体験の原点にあることの価値を述べている（ネス 1997、p.3）。
- 34) 大岡、前掲書、p.130  
 35) 有名な『古今和歌集』仮名序に「やまとうたは、人の心を種として、よろづの言の葉となれりける」とある。
- 36) 大岡によれば、和歌とは「和する」関係である。「互になごやかに和らぐ」という意味。つまり相手と調子を合わせて唱和し、調和しあうことが、和歌という語の根本的な意味である。それは、自然に対しても言える。（大岡、前掲書、p.60）
- 37) 同上書、p.61  
 38) 武田 1946、pp.11-15  
 39) たとえば、小西甚一は、「言霊」の思想が、古い時代には生き生きと生きており、万葉の歌の表現は、この言霊に裏打ちされて、「素朴的一交感的自然感情」を持つものと特徴づけられる、それに対して、古今和歌集の自然は、言霊の残響を潜めながらも、自然を理智的に捉えていると分析している（小西 1985b、pp.137-141）
- 40) 岡野 1998、p.53  
 41) 同上書、p.53  
 42) 言葉そのものが呪性、霊性を持つとする「言霊」の思想である。（小西 1985a、p.94）
- 43) 武田 1946、pp.187-189  
 44) ピーパー 1988、p.25  
 45) 同上書、p.117  
 46) 稲垣 1996、p.124  
 47) 大野他編 1990、pp.127-128  
 48) たとえば、内閣府に「仕事と生活の調和推進室」が設置され（2012）、ワーク・ライフ・バランス社会に向けて、官民協力体制の強化が推進されている。

#### 引用・参考文献

- アルネ・ネス（斎藤直輔・関龍美訳）、ディープ・エコロジーとは何か、文化書房博文社、1997  
 稲垣良典、天使論序説、講談社、1996  
 入江重吉、エコロジー思想と現代、昭和堂、2008  
 大岡信：言葉の生まれる場所（大江健三郎編集代表『叢書文化の現在 I 言葉と世界』岩波書店）、pp.201-220、1981  
 大岡信、古典を読む万葉集、岩波書店、2007  
 大岡信、日本の詩歌、岩波書店、2005  
 大野晋他編、岩波古語辞典補訂版、岩波書店、1990  
 岡野弘彦、万葉の歌人たち、NHK 出版、2005  
 岡野弘彦、万葉秀歌探訪、NHK 出版、1998  
 熊倉敬聡、汎瞑想、慶応義塾大学出版、2012  
 小西甚一、日本文藝史 I、講談社、1985a  
 小西甚一、日本文藝史 II、講談社、1985b  
 斎藤茂吉、万葉秀歌（下）、岩波書店、2011  
 佐々木健一、日本的感性、中央公論新社、2010  
 志村ふくみ：色と糸と織と（大江健三郎編集代表前掲書）、pp.69-95、1981  
 志村ふくみ、一色一生、求龍堂、1982  
 志村ふくみ、織と文、求龍堂、1994  
 志村ふくみ、篝火、求龍堂、2004  
 志村ふくみ・井上隆雄、色と糸と織と、岩波書店、1986  
 志村ふくみ・志村洋子、たまゆらの道、世界文化社、2001  
 志村ふくみ・鶴見和子、いのちを纏う、藤原書店、2006  
 鈴木善次：環境教育の現状と問題、（伊東俊太郎編集『環境倫理と環境教育』朝倉書店）、pp.148-160、2008  
 武田祐吉、萬葉自然、弘文社、1946

ドナルド・キーン（土屋政雄訳）、日本文学史—  
古代・中世篇—、中央公論新社、2003

ドミニック・シモネ（辻由美訳）、エコロジー  
—人間の回復をめざして—、白水社、1980

沼田眞：生態学からみた環境教育、（伊東俊太郎  
編集、前掲書）、pp.138-147、2008

フェリックス・ガタリ（杉村昌昭訳）、三つのエ  
コロジー、平凡社、2008

藤井守一、染織の文化史、理工学社、1986

森岡正博：ディープエコロジーの環境哲学—その  
意義と限界—、（伊東俊太郎編集、前掲書）、  
pp.45-69、2008

ヨゼフ・ピーパー（稲垣良典訳）、余暇と祝祭、  
講談社、1988

（受付：2013年9月14日）  
（受理：2014年1月23日）

